

# 春の幻

豊島与志雄

青空文庫



春を想うと、ただもやもやつとした世界の幻が浮んでくる。それは日向に蹲つてゐる猫で象徴される。日向の猫の眼が、細い瞳をぼんやり開きかけては、またうつとりと閉じていくように、春の息吹きは、あらゆるものの眼を閉じさせる。冷い空気と暖い空気とがもつれ合つて、なま温い靄を蒸発させ、光と影とが入乱れて、茫とした反映のうちに融け込み、物の輪郭がくずれて、太い柔い曲線にぼかされ、あらゆるものの露わな面が——その奥から覗く神秘的な眼が、宛も息を吐きかけられた硝子のように、ぼーっと曇つてゐる。何一つはつきりしたものはない。凡てがぼやけている。うとうとなごやかに仮睡している。

けれども、日向の猫の身体が、肉感的な微妙な触感をそそる毛並を揃えて、何かしら寧猛な淫蕩なものを内に蔵しながら、温い息に揺いでるように、春の息吹きに曇つてるこの盲いた世界も、喘ぐ……というほどではなくとも、或る気ぜわしない不安な呼吸に肉感的な波動をなしている。触れたら掌がむずむずしそうな、無羞恥な蠢めきをしている。脂濃い女の髪の毛の、一筋一筋が生きていて、それが一塊にもつれ合つて、じつとりと寝乱れた形である。

日向にまどろんでる猫は、無神論者……というより寧ろ、無神者である、彼が所有してる神もなければ、彼に君臨してる神もない。神のない世界に日向ぼっこをしている彼は——淫蕩な身体をうつつりと横たえてる彼は、刹那主義の享樂者である。そして、

神のない地上の刹那々々の享樂は、如何に蠱惑的でまた力弱いことであろう！ 其処に、春の歡樂と哀愁とがある。一の面影を石に刻み込むだけの力強い執着は、この世界には存在し難い。一の面影から他の面影へと転々と移りゆく所に、若々しい生命の喜びがあり、忘られた面影やまだ見ぬ面影が現在の面影の上に重なってきて、やるせない惑わしが生ずる所に、神のない樂園の悲しみがある。

此の世界を見つめてみると、もやもやつとした中から、次第にさまざまな象が浮出してくる。——その少しを捉えてみよう。

桃や桜や菜種や紫曇英などの花が咲き乱れている。葉が少なくて花が多く群つてゐるのは、宛も人造花の姿である。自然に咲いた花

によりも、室咲の花、紙や布で拵えた花、それにより多く似てるそれらの花が、如何に華かでもた淋しいか！　そして上には、日の光の曇った盲いた空が、余りに強い光や風を防ごうとするかのように、軽やかではあるが低く狭く垂れている。息苦しい陶醉が地上を支配する。自分の舞に眼の眩んでる蝶が、物狂わしく行方に迷っている。自分の声に魅せられてる小鳥が、喉の裂けるまで囀り交わしている。そして今、それらのものをのせた大地の肌が、種子の芽ぐみ卵の孵る温気にじっとり汗ばんで、間を切つて息している。息と汗の蒸気とがもつれ合つて、ゆらゆらと陽炎の立つ片隅に、まだ背肌の乾ききらない蛇が、淫蕩なとぐろを巻いている。叢の影から、蛙が大きな目玉をむいている。朽葉の上には、

蛞蝓が鈍銀の粘液をぬたくりながら、匍いだしかねて角を潜めて  
いる。彼等は——蛇と蛙と蛞蝓とは、互の恐怖から悚んでるので  
はない。無関心な眼で互に眺めながら、自分自分の猥らな思いに、  
うつとりと考え込んでいる。そしてそのまわりを、紺青に金線の  
ある蜥蜴が、ひよいひよいと頭をもたげては、また小足にすばし  
つこく馳け続ける。やがて彼は喉が渴いて、顎をぴくぴくさせな  
がら、池の水を飲みに行く。池の中には、泥にしつかと四足を踏  
み込んだ大きな牝蝦蟇の背中に、幾匹もの牡蝦蟇が群がって、執  
拗な争いのうちに絡みあっている。氣を失った牝蝦蟇は、なお背  
中に一二の牡からしがみつかれたまま、臍のない太鼓腹を上にし  
て、ばかりと水面に浮んでくる。

そういう自然に取巻かれて、蜜蜂の羽音のする物影に、二人の男が若草の上に寝そべっている。その一人は上気した艶やかな頬を輝かして、薄ら日の光を微笑の眼で迎えながら、独語の調子で語り続ける。

——だって、どうにも仕方がないのだ。僕の魂は風船玉のようなんだ。一つ処に繋いでおいたら、空気がぬけてしぼんでしまふばかりだから、風のまにまにとぼしておくのさ。何か一つを選べって？ 選べるくらいなら、こんなに彷徨し続けやしない。僕的眼には凡ての女性が、同じくらいに、そして別々の色合で、みな美しいのだ。昼間の倦い明るみの中に居ると、僕の心はあの娘の処へ飛んでいく。娘の小ちやな魂を、ぎゅーと掌の中に握りしめ



て、空高く放り上げてやろうか、地面の上に踏みつぶしてやろうか、それとも胸にやさしく抱いてやろうか、何れともきめかねて、惑わしい思いのうちに時間が過ぎる。その躊躇の間が楽しいのだ。馬鹿げた空想が次から次に起ってくる。そして空想の合間合間には、これが自分の選ぶべき娘だろうか、もっと他に優れた娘がいはいはすまいかと、世界中の処女をよせ集めて、その顔を一つ一つ覗いてみたい気がするのだ。そのうちに僕は凡てが懶くなってくる。あるがままに凡てを受け容れたい気になってくる。けれども、しつとりとした宵闇の中に夜の灯が閃きかけると、僕は蘇ったように身体を起して、華やかな巷の方へ狙い寄っていく。豊満な肉体を臙脂の香りと包んだ怪しげな女性が、ずらりと僕の前に並んで

いる。どの顔にも見覚はないが、どの顔にも親しみがある。盃に映った火影、なよやかな衣擦れの音、物に遮られた街路の擾音、凡てのものが、踊れ、踊れ、狂うまで踊れ、と囁きかけてくる。じつとしていることができないのだ。ただむちやくちやに、心を怪しくそそるようなことがしてみたくなるのだ、しないではおれないのだ……。

それらの言葉を、も一人の男は眼を伏せて聞いている。やがて彼は黙って立上って歩み去る。首垂れて眼を地面に落しながら、当もなく歩き続ける。どんよりとした空にいつのまにか蒼白い雲がかけて、細い雨が音もなく落ち初めると、彼は慌しく自分の室に戻ってゆき、いつまでもうっとりと考え込む——片恋のまままで

別れた彼女のことを、心弱さのために我と自ら身を退いて、いつしか音信も途絶えてしまった今、ふつと切なく思い出されて、如何したものだろうかと、やるせない迷いのうちに、空想の輪を十重二十重に織り出して、彼女と自分とをその中に絡め溺らしてゆく。

それらのものの上に、夜の露が繁く結ばれて、清浄な朝日の光が、澄みきった爽かな世界を齎してくる。萌え出たばかりの瑞々しい花や葉や、眼覚めたばかりの汚点のない魂が、一度にぞっとおののいて、眼に見えない輝しいもの——神とも云えるもの——の方へ、おずおずと瞳を挙げる。清らかな求道の園である。然しそれはただ一瞬のことである。間もなく凡ての瞳が、春の息吹き

にふーつと曇ってくる。そして、神のない地上の力弱い楽園が――  
――刹那々々の歡樂と其処から来る哀愁とが、凡てを包み込んでいく。

私の斯かる春の幻は、可なり不安で揺ぎ易い。實際、春は余りに慌しい。私一個の感じから云えば、桜の花の開きそめる四月上旬までは、まだ多分に冬であるし、木の葉の出揃った新緑の頃は、春と異った別の世界である。

# 青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第六卷（随筆・評論・他）」未来社  
1967（昭和42）年11月10日第1刷発行

入力…tatsuki

校正：門田裕志

2005年12月7日作成

2006年1月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

# 春の幻

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>